

人格の同一性 — 単一理論と複合理論の対立 —

杉浦 諒

本論文では心身問題の一つと考えられている人格の同一性という問題について取り扱う。これはある人がその人であるために必要かつ本質となるような基準は何かという問題である。多くの哲学者がこの問題に取り組んだが、本論文では主にシドニー・シューメイカーとリチャード・スウィンバーンという二人の哲学者を中心に扱う。

シューメイカーは人格の同一性について、人格の同一性を循環することなく、何か物的なものによって価値のあるような説明を与えることができるとした複合理論の立場をとる。そして、記憶の連続性と、ある人の性格や人格上の特性の連続性を合わせて《心理的連続性》と呼び、これを人格の同一性の本質と置いた。一方で、スウィンバーンは複合理論の立場を否定し、自身の立場を単一理論に取る。単一理論は複合理論とは反対に、人格の同一性には価値のあるような物的説明を与えることはできず、それらとは区別されるような何かあるものであるとする立場である。そしてスウィンバーンは、アリストテレスの実体の説明の枠組みを拡大して援用する。アリストテレスの説明では物の同一性には質料の連続性が必要であった。しかし、人間が生き続けるために物的なものの存在は必要ないとしたスウィンバーンは、人間が物的な身体と非物的な原質 (the soul) から成るとし、後者の連続性が生き続けるためには必要であるというように主張した。

この異なる立場をとる二人の争点をまとめてみると、大きな対立点として、人格の同一性が何か他の物的なものでもって還元できるかどうかという点があげられることを確認できた。しかしながら、この二人の哲学者の議論は主に思考実験によって、進められてきたものであった。そこで私は、両者が重要であると考えた脳についての研究結果を複合理論と単一理論という二つの異なる立場から分析し、それらの分析結果も踏まえたうえで、人格の同一性について再検討を行った。

結果としては、本論文で挙げたような事例を考えるうえでは複合理論の立場をとるほうが困難が多いということが明らかになった。スウィンバーンが用いた、理論を採用する基準としてより単純な理論を採用するという単純性の原理で考えると、単一理論をとるほうが良いように思える。しかし、私は単純性という点だけで判断を行うのは危険だと主張し、また、現状ではどちらの立場も積極的に取る理由はまだなく、様々な面から多角的に検討する必要があると主張した。そしてその結果、物的法則と共存可能である複合理論を現時点で棄却すべき段階ではないということを示唆した。

(指導教員 横山幹子)